

(西暦) 2014 年度 博士前期課程学位論文要旨

自閉スペクトラム症児を育てる母親のレジリエンスのプロセス

学位の種類： 修士 (作業療法学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 13896607

氏名：日高 幹代

(指導教員名：伊藤 祐子 准教授)

注：1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

● 目的

自閉スペクトラム症児 (ASD 児) を育てる母親のレジリエンスの要因とプロセスを、母親の行動の背景にある意味も含めて質的に検討することを目的とした。

● 研究方法

本研究では、レジリエンスを「(ASD 児の母親が) 様々な困難な状況に直面し、ストレスや不安を感じた際、そこから立ち直り、日常生活を維持していける能力」と定義した。学齢期の ASD 児の母親 14 名を 2 グループに分け、各グループに 2 回ずつフォーカス・グループ・インタビューを実施した。データ収集は 2013 年 11 月、12 月に行った。分析方法は、Charmaz のグラウンデッドセオリーを参考に継続比較分析を行った。

● 結果

分析により、6 個の概念的カテゴリー、19 個のカテゴリーが生成された。母親のレジリエンスのプロセスは、『不安やストレスから立ち直る』、『日常生活を維持していく』、『展望が見えてくる』の 3 つの様相の間でレジリエンスの要因が相互作用していた。【不安やストレスを解消してくれる他者との関わり】と【障害特性とわが子の個性の理解】は、相互に影響して強化し合い、母親が『不安やストレスから立ち直る』力を促進させていた。また、これらの相互作用を基盤として起こる経験の蓄積と認識の変化は、母親が『日常生活を維持していく』能力に影響を与えていた。【臨機応変な対応と状況への適応】と【母親主体の活動】といった、より目的的で意味のある活動が増えていくことで、認識に変化が起こり、体験していた当時は辛かった出来事について《過去の経験を肯定的にとらえる》ようになっていた。このように様々な活動を通して変化を受け入れながら『日常生活を維持していく』ことにより、母親の不安は、《漠然とした不安から具体的な不安へ》と具体化していき、【わが子らしい生活の展望】を持つなど今後の『展望が見えてくる』様相へと発展していた。また、プロセスは一方向ではなく、両方向に影響を与えながら機能していた。

● 考察

本研究の結果は、障害児の親のレジリエンスに関する先行研究と概ね類似していたが、個々の要因の質には違いが見られ、ASD 児の母親独自のレジリエンスの要因が見出されたと考えられる。また、ASD 児の母親は日常生活の中で、認識と行動の両方でレジリエンスの要因を強化しあいながら、経験を積み重ねていくプロセスであることが推察された。

● 結論

ASD 児を育てる母親のレジリエンスの要因とプロセスを質的に検討した結果、様々な要因が相互作用し機能するプロセスが見出された。作業療法士は多角的な視点を持ち、母親自身がレジリエンスのプロセスを自覚し、日常生活に活かすことができるように促すことや、レジリエンスの要因の相互作用性を利用した支援の重要性が示唆された。